

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2015年5月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.44

発行日 平成 27 年 5 月 13 日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫



2015年3月14日神奈川県藤沢市ル・クラシック

若葉青葉が目にしみる、すがすがしい季節となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。3月14日の純正律音楽コンサートは初めて藤沢市での開催でしたが、多くの方々にご来場いただき誠にありがとうございました。

さて、玉木宏樹が作曲した「怪奇大作戦」(1968年作品)がTOKYO MAXテレビ「円谷劇場」で3月29日から毎週深夜24時30分再放送がスタートしました。御覧いただければ幸いです。

また、1981年にテレビアニメスペシャルとして東映動画(現・東映アニメーション)が制作し、フジテレビ系列にて放送された玉木宏樹作曲の「ルパン対ホームズ」のBGMが初めてCD化されています。玉木宏樹の作品はまだ健在です。

今後のコンサートは、8月28日株式会社読売情報開発主催、サイエンスホール、10月23日長野県岡谷市文化会館カノラホールで開催予定です。

私の教え子たち

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

会員の皆様！お元気でいらっしゃいますか？今年に入り航空機による事故やネパールの大地震など悲しいニュースが多く伝えられています。最近では箱根も危なくなってきました。どこにいても何が起こるかわからない時代を受けて気候も春を感じる暇がなく夏に突入のような感じがします。

春眠暁を覚えず！と言いますが、いつも朝、iPadを手に原稿を書き始めるのですが、今回はなかなか筆が進まず事務局の方にご迷惑をかけています。私事ですが、朝から「黒田光線治療器」をかけながらウトウトするのがとてもよい気持ちなのです。（笑）ご存知でしょうか？この治療器は我が家に30年近くあり大活躍しています。もちろん！細胞の活性化もいたしますので、深づめをした時などは1時間ほどで肉が盛り上がってきますから、本当に助かります。以前、主人が海の中の岩で足を切った時にも大活躍でした。本当は病院で消毒をして縫ってもらわないといけないほどひどかったのですが、行った病院が緊急手術中で、あと5時間後にどうぞ！と言われ、とりあえず自宅に帰り光線をかけることにしたのですが、どんどん皮膚が下から再生してきてびっくり！もう一つびっくりしたことは、きれいになった皮膚を触ると痛いのでまだかけ続けていましたら、皮膚の下から小さい貝殻が幾つもでてきたのです。この光線器は身体の不純物を出すと聞いていましたが、これにはびっくり！我が家の必需品の一つとなり大活躍をしています。

2015年3月、去年に引き続き「洗足学園室内楽フェスティバル」がありました。今年はBコースという日本を代表する東京クアルテットの池田菊衛先生、磯村和英先生、チェロの山崎伸子先生などの先生方と一緒に演奏するコースが大人気で、生徒さん達、先生方からもとても喜んでいただきました。やはり、素晴らしい先生方と室内楽を経験することで生徒さん達の成長が見られることはとてもうれしいものです。この頃からきれいなハーモニーの取り方を自然に学ぶことも素晴らしい経験です。

そして、この3月にはうれしいことがもう二つ。私の生まれ故郷の愛知県から「平成26年度愛知県芸術文化選奨文化賞」をいただき授賞式に行ってきました。もちろん今活動していることにですが、特に昭和57年から毎年「子供のためのコンクールin刈谷」の審査員を休まず続けていること、そしてこのコンクールから育ってきたヴァイオリニストがたくさんいること、愛知県の音楽界のレベルアップに貢献したことが評価されたようです。横浜文化賞について出身地での評価はうれしい限りです。

来年は大台にのる年齢となります。悔いのない人生になるようにこれから、もっともっと精進していきたいと思うこの頃です。

そしてもう一つ、7歳の時から私が教えている毛利文香さんが5年ぶりに行われたパガニーニ国際ヴァイオリンコンクールで見事、第2位に入賞！新聞はもちろんのこと、バスや新幹線のテロップにも「横浜の毛利文香さん、パガニーニ国際ヴァイオリンコンクールで第2位」と流れ、一躍話題の人になりました。横浜市長、県知事、川崎市長に文香さんと一緒にご挨拶に行きましたが、どこに行っても祝福の嵐でした。特に横浜市役所では「横浜の毛利さん！」と全国的に報道されたせいか、職員の方々自ら花道を作り大きな花束を持って歓迎していただきました。

どんどんこれから世界に出て大活躍をしてくれるでしょう。これからの楽しみが、またふえてきました。おかげさまで幸せです。

今年の純正律音楽研究会最初のコンサートは、3月14日東京を離れ藤沢で三宅さんの親友でいらっしゃる中村美香さんのご好意で行われました。会場はとても雰囲気があり「？」響きもちょうどよく、心地よく演奏させていただきました。お客さまも「また聴きたい」と、とてもお客様と一体感のあるコンサートになりました。また、玉木ファンが増えてくれたと思います。打ち上げのお寿司屋さんも御洒落で美味しかったです。

美香さん！本当にありがとうございました。これからも応援よろしく願い申し上げます。

今回は、8月28日(金曜日)株式会社読売情報開発主催で千代田区の科学技術館、サイエンスホールで開催されます。10月23日(金曜日)には長野県岡谷市文化会館カノラホールでのコンサートが決まっています。ぜひ皆様お誘い合わせの上お目にかかせていただきたく思います。

さて、私の体重がどうなったか前号をお読みの皆様、ご心配をされているのでは？

おかげさまでキープをしております。昨年末よりほぼ10キロほど体重が減り、パンタロンがほとんど下に下がってしまい困っています。

世の中のみなさま！ダイエットしても体重が減らないとよくお聞きしますが、私は、夜7時半以降は食べない、甘いお菓子をほとんど食べないことで体重は減っていきます。そして、車に乗らないで歩くこと。

ぜひ、チャレンジされませんか？

と言いながら、私もリバウンドをしないように頑張ります！

次号でまたご報告をさせていただきます。

夏に向けて元気にすごしましょう！

ムッシュ黒木の純正律講座 第43時限目
平均律普及の思想的背景について(32)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回までに、絵画作品がこの世とあの世の間にある窓の役割を果たしていることを説明してきた。そもそも芸術作品には二つの世界をつなぐという機能が課せられている。絵画の場合、額縁と窓枠の形状の類似からこの機能は理解しやすい。

対して、音楽の場合は、どのように考えればよいのだろうか？かつては協和音は宇宙の秩序の象徴＝シンボルと捉えられていたことは既に述べた。天体の運行がマクロコスモス、人体の体液の循環がミクロコスモスという呼応関係で捉えられ、それらの運動が一定の比に基づいていると考えられていたのである。なお、そのような数比関係のことをハルモニアという。

ここでは更に聖歌について考えてみよう。聖歌の歌詞＝言葉とメロディーは文字通り神の言葉であった。神の言葉である以上、それを勝手に人間が変更することは許されていない。例えば、作曲＝compositionとは新しいメロディーを生み出すことではなく、元のメロディーに対して対位メロディーを置いていくことだったのである。つまり元のメロディーに対して、対位メロディーを com=共に/position=置くこと、というわけだ。繰り返すが、このオリジナルの言葉とメロディー授かりものである以上、それに手を加えることは禁じられているし、更に、ミサにおいてそれが歌われることにより、その歌声には神が宿ることになる。あるいは歌声を通して神と人間が交流する=communicateする、あるいはその歌声の中に神の声を聞くことができるのだとも言える。ここでミサにおける聖体拝領=communionとは、聖体のパンをキリストの身体に変える儀式だということを思い出しておこう。キリスト教徒にとっては、本当はパンなのだけれどキリストの身体のものでパンを食べるのではない。聖体拝領とはキリストの身体そのものを食べる行為なのだ。それを食べ消化することによって、キリストの身体が食べた人間の身体の一部となる。そうすることによって、信徒はキリストと一体化し、更にキリストの身体を通して教会内にいる他の信徒と一体になる。それが聖体拝領=communionなのだ。この言葉には com=共通のという接頭辞がついていることを確認しておきたい。同じように、聖歌のメロディーとその歌詞＝言葉とは直に神につながっているものなのである。

先ほど、この宇宙＝コスモスは数比関係で表されるハルモニアの原理に基づいていると考えられていたことを述べた。音楽はその数比関係に基づいている技芸として尊重されていたのである。ここで純正律が $n/n+1$ という数比関係で成り立っていることを思い出しておこう。1/2 がオクターヴ（ドード）、2/3 が5度（ドーソ）、3/4 が4度（ドーファ）などである。だとすれば、このような $n/n+1$ に基づいた音程が他の音程に比べて特権的な地位を与えられていたことはすぐにでも分かるだろう。つまり純正律と呼ばれる綺麗にハモった響きは神が宇宙＝コスモスを想像した時に定めた比率関係に基づいていると目された響きなのであり、だからこそ人々はそこに神の姿を見たのである。

以上が、音楽の背後に神を想定した象徴のシステムの説明である。

二人のユニークな女流ヴァイオリニスト

玉木宏樹遺作

12月に出版芸術社から刊行予定の「クラシック埋蔵金発掘指南書」の入稿期限が8月一杯なのに、やっと書き始めたのが7月末。ただ文章を書くだけでなく、150曲を紹介するため、CDを聴き直したり、作曲家の生涯を調べたりするのに結構時間をとられたので頭の中が山火事状態の中、なぜか二人のユニークな女流ヴァイオリニスト(これが本当に美人なんです)が、私の事務所を訪れてくれました。一人はノルウェーの民族楽器、ハルダンゲル・ヴァイオリン奏者の山瀬理桜さん、もう一人はNY在住で、タップダンスを踊りながらヴァイオリンを奏くというかなりお茶目なヴァイオリニスト、小澤真智子さんです。

ハルダンゲル・ヴァイオリンと山瀬さんのことについて説明しておきましょう。

ハルダンゲルはノルウェー特有の民族楽器ですが、ハルダンゲル・ヴァイオリンとも言う通り、外見は何となくヴァイオリンに似ています。ペグとか渦巻きとか胴体の回りの装飾とかの見た目を除き、弦は4本だし、弓で奏くのも同じですが、ヴァイオリンと大きく違うのは、メロディを奏く4弦の下に張られた5本くらいの共鳴弦との相性を考え、4本のメロディ弦もいろんな調弦に変化するのです。楽器自体の鳴りはそれほど大きくないのですが、一番の特長は、共鳴弦との響きあいがとても豊かなサウンドになることで、何とんでも余韻の美しさにはしびれてしまいます。私が日頃から主張している純正律の世界に限りなく近い音色です。

ハルダンゲルの共鳴弦は多分ヴィオール系の名残りかも知れませんが、この倍音豊かな純正律的ハモリは人々をしびれさせ、その快楽的な踊りは宗教者と為政者に恐怖感を与えたため、弾圧され、演奏禁止にされてしまいました。そこでハルダンゲルを奏く人たちはカナダへ移住したそうです。しかしその地でもノルウェーと同様の迫害にあい、彼らは追放され、やむなくアメリカのアパラチアへ移住しました。そこで生まれたのがいわゆるマウンテン・ミュージックで、その後ウエスタンのカントリー・ミュージックへと発展しました。そこで奏かれるヴァイオリンはフィドルと呼ばれていますが、そのフィドル演奏の起源が、ハルダンゲル・ヴァイオリンなのです。もう共鳴弦はなくなっているのに、昔の調弦法に合わせ、いろんなクロスチューニング(クラシック的に言うなら、スコルダトゥーラ)で演奏するのです。ニューグローヴ音楽大辞典によると、こういうスコルダトゥーラ調弦法は20種くらいあるそうです。

グリークの「ペールギュント」の「朝」のメロディはハルダンゲルの共鳴弦の調弦と同じだそうです。またグリークはハルダンゲル音楽からかなりインスパイアされており、ピアノ曲の多くはハルダンゲル音楽だともいわれています。

私も山瀬さんの楽器を少しさわらせてもらいましたが、弦の張りが弱いせい、ヴァイオリンの弓で普通に奏こうとすると、音がひしゃげてしまいます。ですから、スーッと滑らかに奏いて、共鳴弦との響きを豊かにすることが命だとわかりました。

*小澤真智子さん

そしてもう一人はニューヨーク在住、かなりエキセントリックでユニークな演奏活動をなさっている小澤真智子さんです。「クラシック埋蔵金」の原稿締めきり間近でウンウン唸って作業していたある日に、ストリング誌の編集長、青木さんから電話があり、「とても変わった、おもしろい女流ヴァイオリニストがいますので、紹介したいんですが、いかがですか？」とのこと。私はもともと好奇心のかたまりで、変わったことや、変わった人物は本来大歓迎なのですが、その時は原稿のことばかりに気をとられていたので、とっさに頭が回らず「きっと玉木さんと気が合うと思います。一度ぜひ逢ってみて下さい」との青木さんの言葉にも何だか気のなさそうな返事をしたように思います。すると青木さん、「ストリング誌の2007年8月号に彼女の記事が載っていますので、お持ちでしたらお読みください。また電話します」。これはかなり強引ですね。なんだか挑戦されたような気分で、その8月号の記事を読むと、芸大時代に、普通のヴァイオリンの学生のように、クラシッケー本で行くということにあき足らず、芸大の廊下で即興演奏をしたりしてみんなの響きを買っていたようで、ふとしたことで習ったタップダンスにとりつかれ、それ以後タップダンスと即興演奏というパフォーマンスの場を得るためニューヨークへ渡ったというのです。私は、インタビューの始めの方しか読みませんでしたが、これは大変面白い人だと直感し、うちの事務所でお逢いしましょうと返事しました。

ここで少し私なりのコンサート形式批判をひとくさり。私はクラシック関係のコンサートのあり方が非常にうす気味悪く、若い時にクラシック界からドロップアウトしました。何がいやだと言っても、あの一段高いステージから、オレの音楽はすごいんだぞ、やい聴きやがれ、という見下ろしの態度をとる人、または、私はこんなに一生懸命、今日の為に練習しました、その成果をお聴き下さい。という練習成果の発表会、こんなものに、高いお金と時間を捧げるなんて愚の骨頂。まして、終わってからの楽屋で「おめでとうございます」が飛び交うことに何の違和感も覚えない人たちとは、私は全く人種が違うなあ、と驚きあきれます。だいたい一段高いステージ空間というのは、お芝居でもオペラでも、全く非日常性のイリュージョンの世界。そこに立つスターたちのオーラを浴びに行くものであり、そういう自信のない人はステージなんか立たず、ライブハウスやホームコンサートのような身近な空間で、お客さんとの一体感をめざせばいいのです。私もオーケストラにいましたが、毎日毎日ベートーヴェンの洪水、しかもオケの団員も聴衆も、本当にベートーヴェンの良さが分かっているのか、求めようとしているのか、全く不明のままの状態では甚だ居心地悪くなる一方なので、私はさっさと逃げだしました。そういう気分が未だに充滿している私ですから、クラシックしかやらない人には全く興味が湧かないのです。そこへ、タップダンスとヴァイオリンをやる女性がいるなんて考えただけで笑っちゃいます。この笑う、というのは私にとっては最高のホメ言葉な

んですが。

さて、お昼の 12 時ころ、青木さんと小澤さんが事務所に来られました。小澤さんはその夜、成田発で NY 行きという忙しいスケジュール。じゃ、よけい急がなければということで、型通りの挨拶もそこそこに、私は自分の説明がわりに、自分の CD を 3 枚くらい立て続けにかけました。彼女はなかなかの美人ですが、面白いことならなんでもやりますよ、という戦闘モード(言いすぎかな?) が直に伝わってくる非常に分かり易いタイプ。これがニューヨーク・スタイルなんでしょうね。「私、ユニークですから」と自分で仰言るので「自分から言うのかい? 」というと「ニューヨークですから」と大笑い。また、面白いと思ったことにはすぐ反応するあけっぴろげな素直さというのは仲々得難い雰囲気です。私のおしゃべりヴァイオリンや、ペグ演奏(糸巻きだけで音程を取る)に笑い転げ、エレキ・ヴァイオリンの話やら、ヴァイオリンはジャズに向いているか等と話しながら、彼女がいたく感激し、今日来てよかったーと叫んだのは、私が思いついて特注した四弦全部を同時に演奏できる弓でした。彼女は最初その弓をどういう意図で作ったのか分からなかったけど、私の 4 弦同時演奏をやり出すと「すごーい」と叫んで、「ひかせて、ひかせて」というので「じゃ、やってみな」と楽器ごと渡したら、彼女はすこぶる勘がよく、「あっこんなこともできる」と言いつつ、初めて持った変な弓で、あれこれ奏きはじめ、相当な可能性を感じとったようです。何か人と違うことをやりたいという強力なモチベーションが、彼女の勘の良さを引き出すんでしょう。それはそれで大変けっこう。NY でもこの弓で奏きたい、というので今度帰日する 11 月までに特注しておく約束しました。しかし私がこの弓を特注した最大の狙い、純正律に関しては、いろんな話もしましたが、よく御存知ないようす。そりゃ 1 日だけじゃなかなかそこまではね。しかし彼女の食いつきの良さはまさにフードファイター並みです。

それから彼女は青木さんから渡されていた? 「革命的音階練習」(レッスンの友社刊)にいたく感激したようすで、私がおその効果を実演すると、特にポリリズム系に激しく興味を抱いた様子でした。

私の彼女に対する印象はとてまあかわいいピラニアですかねえ。そうそう彼女の CD も聴きましたが、「どう! 何でもやるでしょ」という意気込みが伝わってくるインプロビゼーションが面白く、タイプは全然違いますが、イヴァ・ビットーヴァを思い出しました。彼女も私と会ったのが面白かったらしく、3 時近くまで大笑い談論でした。

CD レビュー純正茶寮
< Hirisinn >
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

Hirisinn
Bandonéon : Philippe Ollivier
Saxophones : Yannick Jeanno Jory
レーベル : Fur ha Foll



以前に紹介したブルターニュのバンドネオン奏者のフィリップ・オリヴィエとサックス奏者ヤニック・ジョリの新作。Amazonにはまだ販売していないようであるが、購入したいという方は直接このサイトから手に入れることができる：<http://www.philippeollivier.com/magasin/>

ブルターニュ伝統のモード音楽を基にした楽曲は前作同様だが、今回の作品はサーカス公演のために作られ、そしてサーカスの演技に合わせたライブ演奏を録音したものだ。というわけで、相変わらずのフレンチケルト音楽のリズムとメロディーもさることながら、サーカスのウキウキするような雰囲気は伝わる作品となっている。ところどころ笑い転げる子供の声が入っているのが楽しい。この作品を聴くだけでも十分楽しいのだが、やはりサーカス公演も観てみたいと思うのは人情だろう。もちろん You Tube で探せば彼らの公演の様子はアップされているのだろうが、そこはいつか実際に観られる日のことを夢見て、ここは我慢とばかりに、サーカスの様子を思い浮かべながら音楽に耳を傾けている。

それにしてもブルターニュというのは小さいながらも面白い企画が盛んなのだなあ、と感心させられる。あくまでも伝統芸能に基づきながらも、常に今現在に照準を合わせて創作するその姿勢にはいつもながら感心させられる。

日韓関係の論点

純正律音楽研究会 正会員
弁護士 齋藤昌男

1. 緒論

物理的に一番近い国が、いまや一番遠くにいる様である。歴史教科書と慰安婦に代表される歴史認識問題を中心として、百家争鳴である。その上、日本を代表する新聞の虚報記事（全部で13本あるそうである）が問題をややこしくしている。事実関係の把握は大変なので、日韓の事実関係は時系列表でまとめることにする。但し、※印のところは、重要なコメントに当たる部分である。また、朝日新聞に關係する部分は、2014（平成26）年12月23日の朝日新聞（東京版）から引用させてもらった。

2. 時系列表

- ・ 668（天智7）年
統一新羅が樹立される。
- ・ 935（承平5）年
新羅の滅亡
- ・ 936（承平6）年
高麗、後百済を滅ぼし後三国を統一
- ・ 1231（寛喜3）年
モンゴルの第一次高麗侵略
- ・ 1232（貞永元）年
モンゴルの第二次高麗侵略
- ・ 1235（嘉禎元）年
モンゴルの第三次高麗侵略
- ・ 1392（元中9年南／明德3世）年
高麗の滅亡、朝鮮の建国
※朝鮮王朝は高麗の国教であった仏教に替えて儒教を国教に定め、学問（朱子学）を重んじ、科举制度を重要視し、新たな貴族（両班^{ヤンパン}）による儒教社会の形成をめざした。
李氏朝鮮の太祖、李成桂の父はウルスブハといい女真人であった。
- ・ 1482（文明14）年
初めての朝鮮通信使を日本へ派遣
- ・ 1592（文禄元）年
日本の第一次朝鮮出兵
- ・ 1597（慶長2）年
日本の第二次朝鮮出兵
- ・ 1636（寛永13）年

日本の朝鮮出兵後初めて朝鮮通信使を日本へ派遣

- 1868 (明治元) 年
明治維新
※始期と終期については諸説がある。
- 1873 (明治6) 年
征韓論。明治六年政変ともいう。明治政府が朝鮮に派遣した使者が「皇、勅の字を使うのはけしからん、これはシナ皇帝だけが使うことが出来る文字である。」と追い返されたことに端を発し、大久保・岩倉と西郷・板垣・江藤が対立。
- 1894 (明治27) 年
日清戦争
- 1904 (明治37) 年
日露戦争
- 1905 (明治38) 年1月28日
日本政府、閣議にて竹島領有の意思を「再確認」
- 1909 (明治42) 年
安重根、ハルビンで伊藤博文を暗殺
- 1910 (明治43) 年8月29日
韓国併合条約
- 1924 (大正13) 年
京城帝国大学の創立
- 1931 (昭和6) 年9月18日
満州事変
- 1945 (昭和20) 年
日本の敗戦後、38度線が軍事境界線になる。
- 1946 (昭和21) 年1月
南北間の人々の移動が出来なくなる。南はGHQの軍事占領下。北はソ連が33歳の金日成を沿海州から軍艦に乗せて上陸、傀儡政権をつくる。
- 1948 (昭和23) 年8月15日
大韓民国建国、初代大統領は李承晩^{イ スンマン}
- 1950 (昭和25) 年6月25日
朝鮮戦争勃発
- 1951 (昭和26) 年9月8日
サンフランシスコ講和条約
※ 講和会議に「連合国の一員として認められない」との理由により韓国政府は招待されなかった。この為、韓国との正常化は、1965 (昭和40) 年の日韓基本条約締結まで待つ必要があった。
- 1952 (昭和27) 年1月18日
韓国政府、「平和線」(通称李承晩ライン) 設置
- 1960 (昭和35) 年4月
李承晩大統領は4・19革命で失脚し、亡命。

- 1960（昭和35）年8月
ユンボソン
尹潽善大統領が国会議員の間接選挙によって選出される。
- 1961（昭和36）年5月16日
パクチョンヒ
朴正熙等による軍事クーデター
- 1963（昭和38）年12月
新憲法のもとで民政に復帰し、朴正熙が大統領に就任。
- 1965（昭和40）年6月12日
家永三郎、第1次教科書訴訟を提起。
※文部省による教科書検定は憲法違反として提訴。
- 1965（昭和40）年6月22日
日韓基本条約締結
無償経済協力3億ドル、政府借款2億ドル、商業借款2億ドルなどを供与。これは当時の日本のGDPの25パーセントにもなる金額である。在日韓国人の永住許可の承認などが取り決められた。韓国政府も日本政府も、慰安婦問題を含めて、賠償責任は、これで終りと考えていた。
- 1967（昭和42）年6月23日
家永三郎、第2次教科書訴訟を提起。
※1966年の検定において自ら執筆した「新日本史」を検定不合格にされたことを不服として提訴。
- 1973（昭和48）年8月8日
金大中拉致事件
- 1979（昭和54）年10月26日
朴正熙大統領暗殺
統一主体国民会議による間接選挙で^{チュェギョハ}崔圭夏が大統領に選出される。
- 1980（昭和55）年5月17日
粛軍クーデターを起こした^{チョンドファン}全斗煥・^{ノテウ}盧泰愚らによって、軍部が政権を掌握。崔圭夏大統領は辞任。
- 1980（昭和55）年9月
統一主体国民会議による間接選挙で全斗煥が大統領に就任。
- 1982（昭和57）年4月8日
日本最高裁、第2次教科書訴訟に対して、破棄差戻し判決（家永敗訴）
- 1982（昭和57）年6月26日
日本メディアが教科書検定結果について大きく報道。
※事実誤認から、文部省がこの時の検定において実教出版の教科書における中国大陸への「侵略」という記述を、「進出」と書き換えさせたと報じた。
- 1982（昭和57）年9月2日
朝日新聞（大阪本社版）が、「朝鮮の女性私も連行」「暴行加え無理やり」などの見出しで、済州島で朝鮮人女性200人を慰安婦にするため「狩り出した」とする吉田清治氏（故人）の証言初めて報道

- 1983（昭和58）年7月31日
吉田氏が「私の戦争犯罪朝鮮人強制連行」（三一書房）を刊行
- 1983（昭和58）年12月23日
韓国・天安市の「望郷の丘」で、吉田氏が建てた「謝罪の碑」の除幕式。
朝日新聞や韓国メディアが報道
- 1984（昭和59）年1月19日
家永三郎、第3次教科書訴訟を提訴
- 1986（昭和61）年7月7日
「新編日本史」検定最終通過
- 1987（昭和62）年6月29日
盧泰愚民主主義党首による民主化宣言
- 1988（昭和63）年2月
憲法改正により直接選挙によって盧泰愚大統領を選出。
- 1988（昭和63）年9月17日
ソウル五輪開幕
- 1989（平成元）年8月14日
「済州新聞」（韓国）が、済州島の古老や郷土史家への取材を基に、吉田氏の著作を疑問視する記事を掲載
- 1990（平成2）年11月16日
韓国で、慰安婦問題の解決をめざす市民団体「韓国挺身隊問題対策協議会」（挺対協）が結成
- 1991（平成3）年8月11日
朝日新聞（大阪本社版）が、「元朝鮮人従軍慰安婦戦後半世紀重い口開く」などの見出しで、挺対協に名乗り出た元慰安婦の存在を韓国メディアに先んじて報道
- 1991（平成3）年8月14日
挺対協に名乗り出た元慰安婦が、初めて記者会見。金学順さんという実名が明らかに
- 1991（平成3）年10月10日
朝日新聞（大阪本社版）が、「従軍慰安婦加害者側から再び証言」「乳飲み子から母引き裂いた『実際、既婚者が多かった』」などの見出しで、吉田氏に3時間余り取材したとする証言内容を報道
- 1991（平成3）年12月6日
金学順さんら元慰安婦3人が、東京地方裁判所に日本政府を相手にする訴訟を提起
- 1991（平成3）年12月10日
韓国政府は、韓国駐在日本大使を呼び、「歴史的真相を究明してほしい」と要請した。
※韓国政府が日本政府に対し、従軍慰安婦問題で正式な対処を要請したのは、この時が初めて
- 1991（平成3）年12月25日
朝日新聞（大阪本社版）が、「かえらぬ青春恨の半生」などの見出しで、

- 金学順さんの証言を詳しく報道
- ・ 1992（平成4）年1月8日
ソウルの日本大使館前で、元慰安婦らが日本政府に公式謝罪などを求めてデモ（第1回の「水曜デモ」）
 - ・ 1992（平成4）年1月11日
朝日新聞が、「慰安所軍関与示す資料」などの見出しで、旧日本軍が慰安所の設置や慰安婦の募集を監督、統制するなどしたことを示す文書が、防衛庁防衛研究所図書館で見つかったと報道
数日後の日韓首脳会談にぶつけたこの報道は、結果としてその後の韓国側の対日非難を一举に誘うことになった。
 - ・ 1992（平成4）年1月16日
宮沢喜一首相が訪韓。17日の首脳会談で、盧泰愚大統領に慰安婦問題で謝罪。
 - ・ 1992（平成4）年1月21日
韓国政府、慰安婦問題に対して初めて「追加の補償等」を公式に求める
 - ・ 1992（平成4）年4月30日
産経新聞が、現代史家・秦郁彦氏の濟州島現地調査を基に、吉田氏の証言に疑義が生じていると報道。翌月発売の月刊誌「正論」が秦氏の調査報告を掲載。
 - ・ 1992（平成4）年7月31日
韓国政府が「日帝下の軍隊慰安婦実態調査中間報告書」を発表。一部に吉田氏の著作を引用
 - ・ 1993（平成5）年2月
キムヨンサム
金泳三が大統領に就任。
 - ・ 1993（平成5）年8月14日
河野談話
※日本政府が、第2次調査結果を発表。河野洋平官房長官は、慰安婦の募集、移送、管理などで全体として強制性があったと認め「おわびと反省」を表明
 - ・ 1995（平成7）年7月19日
政府主導で、元慰安婦に「償い金」などを支給する「女性のためのアジア平和国民基金」（アジア女性基金）発足
 - ・ 1995（平成8）年8月15日
村山談話
※村山富市首相が、アジア諸国に対する「植民地支配と侵略」への反省とおわびを表明
 - ・ 1996（平成9）年1月4日
国連人権委員会に、ラディカ・クマラスワミ特別報告官が慰安婦に関する付属文書（クマラスワミ報告）を提出。慰安婦を「軍事的性奴隷」と位置づけ、一部に吉田氏の著作を引用。人権委は4月、同報告について「留意する」とした「女性に対する暴力」に関する決議を採択

- ・ 1997（平成9）年1月30日
「新しい教科書をつくる会」設立総会
- ・ 1997（平成9）年2月27日
安倍晋三氏ら自民党若手議員が、慰安婦問題の記述など歴史教科書の見直しを求める「日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」を結成
- ・ 1997（平成9）年3月31日
朝日新聞が、「従軍慰安婦消せない事実政府や軍の深い関与、明白」などの見出しで、慰安婦問題の特集記事を掲載。吉田氏の証言について「疑問視する声」があると指摘する一方、「真偽は確認できない」とした
- ・ 1998（平成10）年2月
キムデジュン
金大中が大統領に就任。
- ・ 1998（平成10）年8月21日
国連人権委員会小委員会が、慰安婦問題を取り上げたマクドガル報告書を「歓迎する」とした決議を採択
- ・ 2001（平成13）年4月5日
扶桑社版「新しい歴史教科書」及び「新しい公民教科書」が検定意見箇所を修正し、検定に合格
- ・ 2002（平成14）年5月31日
FIFAワールドカップ日韓共催大会開始
- ・ 2003（平成15）年2月
ノムヒョン
盧武鉉が大統領に就任。
- ・ 2007（平成19）年3月16日
第1次安倍内閣が、「軍や官憲によるいわゆる強制連行を直接示すような記述も見あたらなかった」との答弁書を閣議決定
- ・ 2007（平成19）年7月30日
米下院本会議が、慰安婦問題で日本政府に謝罪を求める決議を採択
- ・ 2008（平成20）年2月
イミョンバク
李明博が大統領に就任。
- ・ 2011（平成23）年8月30日
韓国憲法裁判所が、元慰安婦らへの個人補償が日韓請求権協定の例外にあたるのかどうかについて、韓国政府が日本政府と交渉しないことを違憲と判断
- ・ 2011（平成23）年12月14日
ソウルの日本大使館前での「水曜デモ」が千回に。挺対協、慰安婦を象徴する少女像を設置
- ・ 2012（平成24）年8月10日
李明博大統領、竹島上陸
- ・ 2013（平成25）年2月
パククネ
朴槿恵が大統領に就任。
- ・ 2013（平成25）年3月1日

- 朴槿恵大統領、三一節記念式典にて、日本の植民地支配を激しく非難。
- ・ 2013（平成25）年12月26日
安部晋三首相、靖国神社を参拝
 - ・ 2014（平成26）年6月20日
第2次安倍政権、河野談話の作成過程などの検証結果を発表。韓国側は反発
 - ・ 2014（平成26）年4月16日 8時48分
韓国フェリー セウォル号転覆事故
 - ・ 2014（平成26）年8月5日
及び6日
朝日新聞が、「慰安婦問題を考える」と題した検証記事を掲載。吉田氏の証言について虚偽と判断し、記事を取り消し
 - ・ 2014（平成26）年9月11日
木村伊量社長が記者会見、吉田証言記事撤回の遅れなどを謝罪
 - ・ 2014（平成26）年12月5日
午前0時50分（現地時間）
大韓航空ナッツ回航事件
 - ・ 2015（平成27）年3月21日
ソウル市内のホテルで、岸田文雄外相、中国の王毅外相、韓国の尹炳世が会議した。終了後に公表された共同報道発表文に「歴史を直視し、未来に向かう」と明記されている。
 - ・ 2015（平成27）年3月31日
夕刊フジ 韓国軍ベトナムで慰安所設置 米公文書など記載（2015年4月2日付週刊文春30ページ、TBSワシントン支局長の記事を引用）

3. 問題解決の道筋

過去をめぐる問題は、そう簡単に解決出来るものではない。アメリカの南部では、150年以上たった今でも、南北戦争当時のわだかまりが色濃く残っているそうである。今回、朴槿恵大統領は、「加害者と被害者という歴史的立場は千年の歴史が流れても変えることはできない」（2013年3月1日光復節演説）とまで言っている。ここでは二つ挙げることにする。

(1) 慰安婦問題

強制はなかったとか、韓国もベトナムで同じような事をしているとか、色々な反論があろう。しかし、慰安婦問題の本質を見失ってはならない。

講談社文芸文庫のなかに、田村泰次郎氏著「肉体の悪魔」「失われた男」と言うのがある。その中に「蝗」と言う短編がある。ずばり慰安婦問題を扱っている。大変ショッキングな内容であるが、慰安婦問題は、大なり小なりここに書かれている様な目に会う境遇におかれているのである。その意味において、日本としては、十二分に陳謝すべきである。

(2) 日韓関係の歴史認識の問題は、数々あるが、その象徴的問題として、韓国が「七奪」として日本を非難している問題がある。「七奪」と言うのは、日韓併合によって、日本は韓国から、主権、国王、人命、国語、姓名、土地、

資源の七つを奪ったというのである。

- (ア)「主権を奪った」というのは全く逆で、清の属国だった李氏朝鮮を独立させたのは日本である。日清戦争で勝利した日本が、下関条約の第1条で、朝鮮の独立を清朝に認めさせた。
- (イ)「七奪」の二番目は、「国王を奪った」である。しかし、日本は李王家を日本の皇族の一員として迎えた。毎年180万円（今の金で200億円）の李王家歳費を計上していた。
- (ウ)「七奪」の三番目は「人命を奪った」である。朝鮮半島の人口統計は1907年に1167万人である。1937年には2168万人である。1944年には2512万人である。この他に満洲や日本へ出て行った人もいる。
- (エ)四番目は、「国語を奪った」である。日本の朝鮮総督府によって1920年に本格的な朝鮮語辞典が完成した。1924年に京城帝国大学に朝鮮語・朝鮮文学講座が開設されている。
- (オ)五番目は、「姓名を奪った」と言うものである。日韓併合の翌年の1911年、朝鮮総督府は朝鮮人が日本式姓名を名乗ることを禁止していた。しかし、1939年に朝鮮戸籍法が改正された。これは朝鮮人満洲開拓団からの強い要望があつて、朝鮮人が日本名を名乗ることを認めざるを得なくなった。
- (カ)六番目は、「土地を奪った」と言うものである。李氏朝鮮時代は所有権の概念が曖昧であつたので、朝鮮総督府は近代的測量技術を導入した。そして1922年において朝鮮半島における国有地及び日本の法人・個人が保有していた土地は、全耕地面積の6パーセントであつた。
- (キ)七番目は、「資源を奪った」との事である。とんでもない事であり、例えば1939年に於いては、日本からの補充金と公債が全予算の25パーセントを占めていた。35年におよぶ日本統治期間を通じて、日本政府がつぎ込んだ金額は、累計20億7892万円で、現在の金額にすると63兆円にもなるそうである。

以上

(平成27年4月15日脱稿)

遺作小説連続 4 回【またしてもモーツァルト】
第一回

玉木宏樹遺作

「舞矢君、いまの君の状態は、気の毒だが最悪だ。とてもとても作曲はおろか、ピアノすらひいちゃいけない、いや、見るのもやめたほうがいいだ。自分自身のことを考えるならば、この際、全てのスケジュールをキャンセルして、半年くらい音楽から遠ざかるんだね。気晴らしにどこか旅行するとか、景色のいいところへ引越るとかいった、思い切った生活の変化が必要だ……。はつきりいうと今の君は完全な音楽ノイローゼなんだよ」

ノイローゼと断定された哀れな患者は、当代きっての売れっ子作曲家、舞矢十四である。作曲家にしておくのはもったいないという人もいる。180 近い身長にやや赤みがかかった長い髪、けだるそうにしながらも人の気をさらさないその独特の表情は、確かにスター的要素があるようにもみえる。

しかし、深刻に苦悩をおびた今日の舞矢は、別人のように見える。

「でもそれはあんまりじゃないか。例のモーツァルト音楽祭はどうなる、病気なら病気でも、それを直すのが君たちの仕事だろう」

舞矢を診察しているのは無二の親友でもあり、パトロンでもある精神医の鷹橋である。背はそれほど高くはないが、よく光る角ぶちメガネをかけ、色やや浅黒く精悍な感じの鷹橋は、医者というよりはスポーツマンのイメージが強い。それでも父の経営する総合病院では、今や名実ともに院長代理格である。二人は高校まで同期生で、片や音楽大学、片や医科大へと、別々の道をたどったのだが、その後も親交を保ち、現在にいたっている。

鷹橋はピアノもうまく、素人作曲家でもあった。

マイヤトシという呼び方で有名な舞矢十四の戸籍上の本当の読み方は、マイヤジュウシである。そんな数字の名前が大嫌いだった舞矢は、長いあいだ名前コンプレックスに悩まされたものだった。なんでも彼の父親が大変な小説好きで、数ある作家の中でも特に直木三十五と海野十三の大ファンだったという。十四日生まれの自分の子供を先人の名にあやかって命名したのも作家にでもするつもりだったのかも知れない。しかし舞矢はその意に反するかのように作曲の道に走ったのである。

「おれ……ほんとうにそんな……重症なのかい、えっ？」

手で顔を覆い、上目づかいで鷹橋を見たがなんの返事もなかった。

作曲家といっても舞矢の場合、いわゆるはやりものだけではなく、守備範囲が大変広い。ヒットソングの数々のほかにテレビやFM各種のテーマ音楽、映画音楽を初め、最近はやりのマルチプロジェクターによるステレオシアターのものや人工衛星のシンボルサウンドまで手がけ、ことごとくに成功を収めてきたのだった。

大学を出てすぐにCMソングの作曲家としてデビュー。クラシックの厳格な技

法をバックに世界中のポップスの新鮮なセンスを身につけ、第三世界の民族音楽にも通じた彼はあらゆるジャンルで成功し、いまや日本は愚か国際的な作曲家として勇名を駆せているのだ。

当年 36 の彼が、足掛け 15 年のあいだにつくった曲数は、10 秒のブリッジから一時間に及ぶシンフォニーを含め、ゆうに一万曲は軽く越えているはずである。この人気絶頂の舞矢がいま、一人のノイローゼ患者として天を仰いでいるのだ。スランプの兆しは一年ほど前のこと。マルチシアターのミュージカルで大成功し、三カ月のロングランで大いに気をよくしていたある晩に、彼は一人の女から電話を受けた。

「舞矢さん……いや先生なのよね、私のこと、おぼえていらっしゃる？」

とっさには思い出せなかったが、あの少しカンばかり歌うような声は確かに聞き覚えがある。そうだ、マリ子だ。大学時代三つ年下の声楽科の学生だった。背中までとどく豊かな黒髪、表情たっぷりの歌声と、逃げてはスリと身をかわすコケティッシュな仕種……。

恥ずかしく照れ臭い、甘酸っぱい記憶に赤面しながら舞矢は答えた。

「覚えてるかってのはずいぶんだねえ。秋友会の案内でも？」

秋友会というのは、ある先生を中心にしたクラス会のようなものである。

「あれは毎年やってるのよ。あんまりじゃないの、一度も来たことないのに」

「ごめんごめん、人妻になった君の姿は、あまりゾっとしないからね」

「ご冗談はほどほどに。今日はちょっと先生に文句があるんでございまーす」

冗談っぽくマースを引き伸ばすマリ子は学生時代そのものだ。

いっとき二人は、他人が恥ずかしがるくらいの仲だったことがある。結婚という二字が頭をかすめたこともあった。しかしあまりにも情緒不安定な二人が狂おしいまでの情熱に耐えられるはずもなく、つまらないことで激しい喧嘩別れをしたのだった。

マリ子は、いま所属しているオペラ団のテナー歌手と一緒にになったという噂を耳にしている。二年前に離婚して目下独身中の舞矢にしてみれば妙な気分である。

「どうしてる、うまくやってるかい？」

「うまくもなにもないわよ、あなたは別れたんでしょ、私は別居中よ」

「……」

「私、文句があるのよ、あの曲、なあに」

「えっ、あのきょくって……」

「まあ、凶々しくなっちゃって……あのミュージカルのことよ」

「いまやっている、あれか？」

「おとぼけもほどほどにしてよ、まあ、あなたはプロの作曲家なんだから、どこに何を使おうとあなたの勝手でしょうけど、でもね……でも、あの曲は私にとってほんとうに大切な曲だったのよ、それなのになによ、あなたってほんとうにウソつきね……やっぱり本気じゃなかったのよね」

舞矢にとってはまさしく晴天の霹靂だった。

しばらく無言が続いた。

そういえば学生時代に、彼女になにか歌らしきものをプレゼントしたことがあ

ったような気がしないでもない。

「まあ、忘れちゃったのかしら-----そうかも知れないわね、あれからたくさんたくさんお書きになってらっしゃるんだから」

舞矢がすべてを思い出したとき、すでにマリ子の電話は切れていた。

記憶力に関して舞矢は、人より数倍自信を持っていた。作曲上で一番重要なのはいうまでもなくオリジナリティである。彼はそのための手段として、抜群の記憶力を武器にしたのであった。あるメロディをおもいついたとき、それが自分の記憶リストになれば当然オリジナルということになる、これが舞矢の信念であった。その信念があろうことか自分の過去の曲によって破られたのである。

舞矢はしばらく、過去からの報復に身を任せた。

短い激情のなかでマリ子とすごした一時期に舞矢は愛の証しとしてある曲を送ったことがあったのだ。今にしてみれば、青臭い照れ臭いことだが、メロディは実にさわやかでノスタルジックないいムードのもので、舞矢がプロの道歩み初めてからもそれはいい意味でも悪い意味でも彼にまとわりついた。少なくとも五年前まではそうであった。

忙しさにかまけたその後の五年間、ついに一度も甦らなかつたあのメロディが、今や大ヒット中のミュージカルのメインテーマとして活躍しているのだ。

スランプはそれから始まったように思える。

三カ月くらいは何事もなく過ぎたが、マネージャーを通しての皮肉が少しずつ増えていった。

「舞矢は自信たっぷりだねえ、偉いもんだ、あのメロディは実になつかしいよ」皮肉や批難が人を通したものであればまだなんとかなる。直接の批難は最大の打撃である。

ある映画の初号試写が終わったとき、舞矢はその監督から呼びとめられた。

「どうも有難う、映画ってものは最終的に音楽だからね」

ラブシーンをとればその右に出るものはいないといわれる有名監督である。

「ありがとうございます。いい絵があればこそ、いい音楽が-----」

「いや、お互いにお世辞はやめにしよう。率直に言ってぼくのラブシーンは三年前からちっとも進歩しじゃない」

「と-----いいますと？」

「君が見抜いたんだ、君がな」

「どういうことなんでしょう」

「まあ、いいじゃないか。君だって三年前のメロディを使ってるんだし、おれは正直言ってガクっときたよ」

それ以来二人は仕事をしていない。嫌われたわけではないとしても多分、互いに内心忸怩としたものがあつたからだろう。

まだ自分のメロディの使い回しを非難されているうちはよかった。マネージャーを通して舞矢は開き直つたのである。

「バカバカしい。ロッキーニをみてみるよ、新作のオペラの序曲がまにあわなくて、昔のやつを使い回しているんだ。ドリーブのコッペリアのワルツなんて最たるもんだ。使い回しじゃないんだよ、ヴァイオリニストのクライスラーに

書かせてるんだよ。それに比べりゃおれなんて健全なもんだ」
弁解も空しくスランプはどんどん進行してゆき、最悪の事態を迎えるにいたった。ついに他人のメロディの盗用が始まったのである。本人に自覚症状がないだけに打撃は深刻だった。

世間も舞矢の名声を考えてそれほど大騒ぎはしなかったけれども地下に潜った噂ほど根強いものはない。

「君の記憶力は限界を越えてしまったんだ。いや、正確にいうと、君の記憶力を整理する引き出しが崩壊してしまったんだね」

鷹橋の声で舞矢はハッと自分を取り戻した。

「じゃあ、どうすればいいんだ、例のモーツァルト祭り、あと半年くらいしかないんだよ」

1991年はモーツァルトの死後 200 年にあたる。ウィーンを中心にして国際的なモーツァルト祭りが企画されていた。全世界あげての、いや地球単位でのモーツァルト祭りのその中でも白眉と目されるものは、プロによる作曲コンクールである。

去年、全世界モーツァルトシンポジウムで議決された最大の呼びものは、モーツァルトの作風でそれをしのぐ作品を創ること、もうひとつ、モーツァルトが今生きていたらどういう作品を創るだろうかという、二つをテーマにした大作曲イベントなのだった。ほかならぬ舞矢によって提案されただけに世界中は沸き立ったのである。

「残念だがモーツァルトのモノ字も思い出さないようにしなきゃ」

「そんなことをいう君自身、実行委員の一人じゃないか、どうするつもりなんだ」

「ぼくだって事態の深刻さはよくわかっているさ、君のぬけたモーツァルト祭りなんてね、世界中から何をいわれるか……そりゃえらいことだよ、考えただけでさっきから身震いがとまらん」

神経のたかぶっていた舞矢はついに泣き出してしまった。

「さっきからいっているように、君には休養が必要なんだ。それを心から望んでいる人がいる。マリ子さんだよ」

カーテンをあけて看護婦が入ってきた。しかしそれは看護婦ではなく、白装束のマリ子だった。激しい情緒を押し隠して微笑んでいるマリ子は、以前にくらべて抱擁力を増した豊かな存在感を漂わせていた。

舞矢はうろたえた。一瞬、身も世もあらず彼女の胸にすがりつきたいという激しい衝動に襲われたが、必死にそれを振りはらった。

「冗談じゃない、やめてくれ、おれはだれにも会いたくないし、だれの面倒もいらん」

「マリ子さんでもかい」

「マリ子だって、君だってそうだ」

めくばせされたマリ子はやや淋しげに、そして少しホっとしたように去っていった。

「じゃ、誰ならいいんだい？」

「-----」

「君には助けが必要なんだ。彼女は本気で心配してるよ」
「よけいなお節介はやめてくれ、もう君にも会いたくない」
「無茶いな、第一ぼくだってつきっきりで君の面倒みるわけにゃいかんだろ。ぼくができることはなんでも協力するよ。いったい誰ならいいのかね」

「-----」
「黙ってるだけなら、悪いが入院したほうがよさそうだ。うちの病室だって満更じゃない。しかし君にとってあまりいい話とも思えないがね」

「待ってくれ-----いま、君はどんなことでも協力するといったよな」

「そうだ、どうすればいい」

「じゃ、モーツァルトに会わせてくれ！」

「なに、モーツァルト！」

一瞬ひるんだ鷹橋をみて舞矢は勢いづいた。

「そうだ、モーツァルトだよ、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、1756年生まれ、1791年死亡の正真正銘のモーツァルトだ」

「そりゃ、君-----」

「不可能だってんだろ。当たり前のことさ。でもね、君も知ってのとおり、ぼくはモーツァルトの再来のようにいわれてきたんだ。なんの苦労もなしにメロディを浪費していくってね」

「-----」

「ぼく自身、あの重っ苦しいベートーベンは好きになれない。才能だってモーツァルトにくらべりゃ百分の一もないに違いない。どうみても軽妙洒脱なモーツァルトの方がより音楽的だと思う。そのモーツァルトの再来といわれているぼくがだよ、もはやネタ枯れしてしまっ、いまや哀れなノイローゼ患者なんだ」

「-----」

「だからね、誰に会いたいかわかれればモーツァルトしかいないんだよ。彼はあんなにたくさん書いているから、必ずといっていいほどモーツァルト特有のフレーズがあるんだ。四小節くらい同じメロディなんてザラにあるんだよ。それでも一曲一曲はやっぱり違う曲なんだよなあ-----、彼も昔のメロディを使い回していたんだらうか？それとも無意識だったんだらうか？」

「-----」

「それに一番知りたいのは、ほんとうに彼自身なんの苦労もなくスラスラと書けたんだらうかということだ。彼だってなにもおもいつかなくなっ、七転八倒したかもしれない。もしそんな姿がみられたとしたら、ぼくのノイローゼなんて吹っ飛んでしまうだらう」

「とうぜん、彼だって人間だからね」

「そうさ、きっと煮詰まって酒をのんだり、トイレにこもったり、賭けごとをしたり-----」

「でも我々はそれを知らない」

「そうさ、神童としてのモーツァルトしか我々は知らない-----。でも彼だって、所詮、しがたない哀れな一市民だったはずなんだ」

「-----」

「ああ、モーツァルトに一目でいいから会えたらなあ、いま目の前に現われたら、彼に祭りの企画をやらせるんだがなあ、いや、それよりも作曲させたい……、どうだ、君だってそう思うだろ」

鷹橋はうつむいて考えこんでしまった。つかのま、優位に立ったような舞矢は、なるべくその時間を長引かせるべく、しばらく無言の状態を続けた。

ふと何かを思いついたように鷹橋が顔をあげた。

「本気で……、モーツァルトに会いたいのかね」

「ああ、そうとも本気さ、しかも正気でね、それがどうした？ おれは狂ってるのか？」

鷹橋はまたもや考えこんでしまった。

舞矢は多少不安になって声をかけた。

「どうしたんだい、おれはたんなるノイローゼなんだろ……、それとも、もっともってこわい病気なのか？」

そうじゃないという風にかぶりをふりながら考えこんでいた鷹橋は、意を決したように顔をあげた。

「ちょっと病気のことはおいといて、ぼくの話聞いてくれるかい？」

「なんだ、いったい」

「いやね、うちの病棟にもいろんな患者がいるもんでね。よくいう話だが、彼らと接していると、どちらが正気かわからなくなることもままあるもんだよ。まあ、そんな中でも多いのが例の誇大妄想狂ね、自分のことをナポレオンだとか豊臣秀吉だとか思いこんでいる連中さ」

「その中にモーツァルトがいるんだな、ぜひ会ってみたいもんだ」

「茶化さないで聞いてくれよ。残念ながらモーツァルトはいないしね。」

そんな患者を全部集めれば、これは一大歴史的博物館なんだ。中にはおもしろいやつがいてね、今日はニーチェ、昨日はプラトン、その前はソクラテスだ、なんて言う元作家がいたりする」

「じゃそのうちぼくだってモーツァルトに成れるかもしれん」

「きみには無理だよ、そんな病気じゃないんだから……。ところで彼らの治療法なんだけど、あいも変わらず、最初は催眠療法だ。例の時間を遡るやつさ。するとほとんどは馬脚を現わして、ある時点から存在がすれかわるんだ。我々はその時点から下意識を掘り起こして彼らを改造しなきゃならん。あいも変わらず根気のいる古くさい方法にしがみついているんだけどね。」

ところがだ、数ある患者のなかにはどう時間遡行しても矛盾しないのがいるんだ。幼児まで遡っても一切人格が入れかわらないし、それどころか歴史的イベントそのものを克明に記憶している連中がいるんだよ。何度実験をやっても間違い一つ起こらない」

「どういうことだい、それは……、その患者はいったい自分のことを誰だといってるんだ」

「そこがまた微妙でね、いま現在、うちにもそれに該当する患者が二人いるんだ。一人は鎌倉時代の娘だといいはっている女で、なんでも母親はある女官に仕えていたことがあり、北条家も知っているというんだ。そこで彼女の記憶を遡ってみると、母親から聞いたという北条家の私生活がもの見事に甦ってく

るんだ。不思議なことに彼女がここへ収容されたときの衣装や言葉使いまでが、まるで鎌倉時代そのものだったんだよ。

もう一人の男はなんと、1970年代のベトナム人だといいはっている。彼も発見されたときは妙な戦闘服を身にまとっていたね。未だに彼は日本語がわからない。自分は解放戦線の兵士でダナン近辺の前線にいたが、恐怖に耐えかねて逃げ出そうと考えていたところだったというんだ。彼は処刑を恐れてか、ほとんど口を開かない。

ところで、この二人には他の患者と違う大きな特長があるんだ。それはね、君も気づいたと思うんだが、彼らはどこからどう見てもその時代の有名人じゃないってことさ。二人が単なる誇大妄想狂だとすれば、何を好き好んでそんな立場の人間になりたいと思う？ しかもこの二人、記憶をいくら遡ってもなに一つ矛盾がないばかりか、かえって歴史の裏話を聞かされているような気分になってくる」

「まさか君-----、ひょっとしてその患者のことを正気だと」

「思っているわけじゃない。だが思わざるを得ないような部分が多いわけだよ」

「いったい、どういうことかな、それは-----、まさかタイムマシンで来たわけでもあるまいし」

「そう、タイムマシンなんて、たわごとみたいなもんだ。まだだれ一人造ったやつもないし、見たやつもない。だけどそれに近い研究をしている男がいる」

「なんだって、おい！」

「ぼくの友人に優秀なコンピュータ・プログラマーがいてね。仮の名を田中となのっている。ただしこの話はまだ君以外誰一人知らないことなんだよ。ぼくだって口外するのは初めてなんだ。さっきずいぶん考えたんだけど、他ならぬ君のことだしね」

「その田中ってのは君のことじゃないんだろうね」

「そうじゃない、あるきっかけで知りあったとき、彼にさっきの二人の患者のことを話したんだよね。すると彼はそれに異常なまでの興味をもったんだ。話を聞いてみると、彼は歴史を調べるのを趣味としていて、しかも催眠術の大家だったんだ。その田中君がね、ビックリするような大胆な仮説を立てたんだ」

「二人に対してかい」

「そう、あの二人はヒョットしたら、何らかの方法でタイムスリップしてしまったのかも知れないというね-----。それ以来、ぼくと彼は秘密の共同研究をくんでいるんだ。しかしこの話は絶対に内証だぜ。これだけは堅く守ってくれ、医者ともあろうものがそんなものを研究しているなんて、物笑いの種だし-----」

「それはいいが、秘密を守ったところでモーツァルトに逢えるわけでもあるまい」

「それはわからん-----。本当にわからないんだ。彼と相談してみるだけのことさ。明日の夜はあいてるかい？」

「仕事をやっちゃいけないんだろ？ じゃいつだってフリーさ」

「じゃ、明日の夜八時、田中君を紹介するよ」

それっきり鷹橋は沈黙を守り、舞矢の質問を一切受けつけなかった。（続く）

ネーミング

純正律音楽研究会会員
椿 友幸

「名は体を現す」という言葉があるが、そのものの名前の「響き」で人の性格やモノのイメージが決まるとよくいわれる。

人が誕生したとき、新しい商品が生まれるとき、名前を考え、名付けることに、頭を悩ますのは皆経験することである。

人やモノに名をつけること・・・ネーミング

このネーミングの考え方を、ネットで調べてみるといろいろと興味がわく。

●音相（おんそう）

音相とは言葉そのものが持つ「意味」と「音」との関係を音声学や、心理学、言語学などの専門知識によって分析する理論（但し学問として存在しているわけではないらしい）

●音運（おんうん）

ネーミングも「音」によって運・不運がある

このことは母音の持つイメージ

ア音	強くて明るく積極的な行動力
オ音	芯はしっかり、黙々と目的を達成する
エ音	我が道を楽天的に、しかも自己売込みの世渡り上手
イ音	理知的、包容力欠如、こじんまりとまとまる
ウ音	地味で引っ込み思案タイプで粘り強く物事をおいつめる

を上手に使う

名前のトップに「ア音」（アカサタナハマヤラワ）を付け最後か途中に「ン」をつけると商品の名前として良いらしい。

●その他

我々でも、親しみやすさ、覚えやすさ、ユニークな語感、整合性、画数などを考える要素に加え、時には、占いの本や占い師への相談などの行動もとる

ところで話題を私個人の体験でお話するとネーミングの話は一段と楽しくなる当然私にも両親からつけて貰った本名はある。

現役時代、ちょっとした事から、ペンネームにと自分自身で「椿 三五郎」という名を持った。当時まだ、あの三船敏郎の「椿三十郎」の余韻が十分世間に残っており、5時半以降のコミュニケーションの場では「三十郎の半人前の三五郎」は大いに受けた。「継続は力なり」とはよく言ったもので、「三五郎」と呼び、呼ばれているうちに、堅物、真面目イメージが、積極的、楽しく、明るく行動的へとチェンジ、90キロ近い体重も何のその、身軽になった感じさえ持つようになった。

どうやら「サンゴロウ」の音運が功を奏したようである。

加えて「椿 三十郎」とのギャップも力になったことは確かである。

現役を卒業してからは「椿三五郎」の名刺を作り、日常活動に少々遊び心を加えて楽しく「純正律」の普及活動に走り回っている。

その活動も少しずつ範囲が広がり、今年度は名古屋から北海道に至る読売新聞販売店ネットワークでの「純正律CD」の販促PR活動が進行中。

玉木さんと出会った頃「純正律」というネーミングについて、彼を中心にスタッフ一同でいろいろ議論をしたものである。「音の自然食」「ピュアミュージック」「心に響く音」等多くの名前が浮かんで消え消えては浮かび「純正律」のまま現在に至っている。

水野さん、三宅さん、吉原さん、彼女たちトリオによる純正律コンサートも定着、好評を博している今、コンサートの雰囲気伝えられる言葉探しが求められていると、私は考えている。

○○○○○純正律コンサート ○○○○○純正律

この○の部分のネーミングを、いろいろあるネーミングの考え方を駆使して、その言葉を聞けば「純正律」の世界がここに響いてくるネーミングを誕生させたいと思っている。

私が「三五郎」の名前で楽しんでいるように。

今後のスケジュール

2015年8月28日金曜日 株式会社読売情報開発主催

【純正律音楽コンサート】会場：科学技術館 サイエンスホール

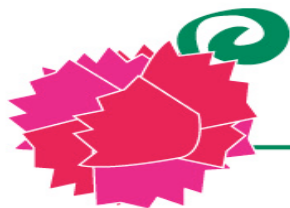
出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

2015年10月23日金曜日

【純正律音楽コンサート】会場：長野県岡谷市文化会館 カノラホール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料：3,500円(会員特別価格3,000円)



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東3-2-5-102 NPO法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

http://just-int.com/

平成27年5月13日 発行責任者：NPO法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫